

府中かんきょう 市民の会

NPO法人 府中かんきょう市民の会々報
2015年 秋号 10月14日発行 通巻58号
発行人：竹内 章（府中市分梅町）
TEL 042-364-3428

2015 田んぼの学校

稲刈り・ハサかけの巻

第10回田んぼの学校が開催。田植え(5月31日)から4か月、草取り・生き物さがし(7月6日)から80日、その間天候不順(猛暑、大雨)と闘いながら、稲はたくましく成長してきた。それは、バケツ稲の生長グラフを見てもよくわかる。9月に入り、雨が多く日照不足で登熟の遅れがあったが、予定の日に待望の稲刈りができ、みなで収穫を喜びあった。

“収穫の秋”にふさわしい日和を期待していた。その期待通り、昨日まで降っていた雨が止み、濡れないで作業できたことを幸いとしたい。

不安定な天候にもかかわらず、生徒さんたち29人、保護者30人。スタッフ陣は市民の会15人、農工大生9人、府中東高校生物部9人の総計92人で下記の作業を行った。実施日は9月27日(日)。



ハサかけを背に、全員で記念撮影。皆さん飛びきりの笑顔

稲刈り・ハサかけの主な作業と時間割

- ①受付(名札、資料配布、出席記録等) 8:30
- ②バケツ稲相談
- ③作業開始に伴う説明(作業予定、稲刈り・ハサかけの手順と雑草展示)／ピオピオさん体操
- ④稲刈り・ハサかけ体験 9:30～11:00
安全第一、稲刈り手本、結束、ハサかけ、落穂拾い
- ⑤まとめ
集合写真、バケツ稲のまとめ方、ふりかえり、次回(10月11日／脱穀・もみすり)の説明、アンケートまとめ、回収
- ⑥終了 11:30



保護者とお子さんが、一生懸命稲刈り

これだけのことを2時間で実施するのは、大変である。その上に隠れた準備作業がある。事実、休みなしでの作業は疲れた。若い人(学生さん)の助力が必要と痛感した。

次に関係した作業で、気付いたことを列記してみる。

- 1.バケツ稲相談／枯らした、茎と葉を区別していない、外出して測定をしない等の人が見受けられたが、大半は立派に育て観察記録もしていた。写真入りの詳細な記録帳を作っていた。それらを是非公開してくれるようお願いした。1昨年のような異常増殖はなかった。
- 2.雑草の展示・説明／前回(7月6日)は雑草として、ヒエ、オモダカ、コナギ、クログアイ、ウキクサを展示したが、今回はクログアイだけが目立った。クログアイとの競合で負けたと思われる。あらゆるものに生き延びるための競合があるが、クログアイは主人の稲をも負かす強い植物だ。隣の第三小学校が栽培している水田をみればよくわかる。一発で殺草する除草剤もない難防除雑草とされている。
- 3.稲刈り・ハサかけ／生徒さんの大半は、初体験であろう。稲刈りの水田かんきょうとしては、クログアイが繁茂している、どろ田(乾燥していない)、倒れた稲がある等で稲刈りに適当でない状態であった。

稲刈りかまの使い方、刈った株の揃え方、数、結束の仕方など簡単に習得できるものでない。全員に体験してもらうことが大切。怪我をしないよう安全に留意すると、スピードが犠牲になる。事前にスタッフの刈り取り試行、刈り取らない区分を残したのが賢明であった。

刈り取り時の株を握った感触、穂の垂れ具合、モミ数の多さから今年は十分な豊作が予想される。収量調査が楽しみである。
(竹田 勇)

田んぼの学校2015

草取り、生き物さがしの巻

したが、アメンボの様子を見ていると、体についたしずくを盛んに拭っていました。

7月5日（日）の午前中はあいにくの雨でしたが、生徒44人のうち27人（+保護者25人）が参加しました。スタッフ等を加えると総計74人の参加となりました。

当日のメニューは稲の生育観察、雑草の除去、田車の体験、水生植物の勉強などです。稲の生育は去年は不調でしたが、今年は順調でした。危惧された稲の成長を阻害するクログアイも少なかったようです。重労働の田車による雑草取りも、スタッフのサポートを得て、子どもたちはすぐに要領をえていたようです。

田んぼの中の生き物観察

私も捕虫網と採集ケースを手し、古里の京都で昆虫とりに夢中になっていた頃があります。はるか昔の幼少のみぎりです。その頃を懐かしく思い出しました。



マイクを片手に昆虫のお話しをする高家さん。右のつこのイラストも作製

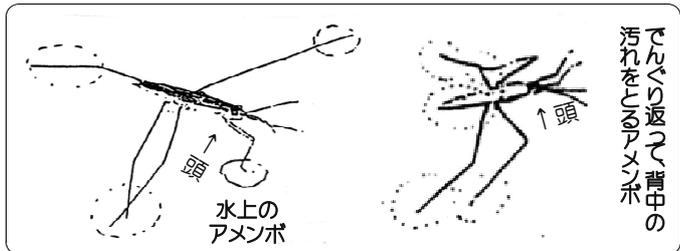
それはさておき、ここでは私の専門の生き物の観察を行いたいと思います。先日の「田んぼの学校」の催しでは、きれいに植えられた稲田のあたりにはさまざまな小さい動物を見ることができました。

水面のウキクサの浮いているあたりにたくさん見られた小さいハエはミギワバエ（ハエのなかまで湿地に棲む）のなかまのようです。この時期のハエは黒いバッグなどを置いておくと、集まってきます。暖かい所がすきなんでしょうね。

アメンボもたくさん見られました。誤って水面に落ちた虫などを見つけて汁を吸い暮らしています。卵も水辺の草などに産み付け、孵化するとすぐに水面の生活を始めます。成長するには脱皮をしなければなりません、水面で行うことができます。この様子を見ていると、とてもたくみで、水中に落ちることなく行います。

アメンボの動きをよく観察していると、とても興味深いしずくを見せてくれます。「昆虫ってどんな生き物？（3歳）」にも書きましたが、昆虫は体が水に濡れると息ができなくなりますので、皮膚はぬれないようにできています。しかし、それでも体が汚れていると、水が付きやすいのでアメンボはたえず体の掃除をしています。

アメンボは水面生活をしているとはいえ、雨は苦手です。先日の田んぼの学校では小雨が降ってい

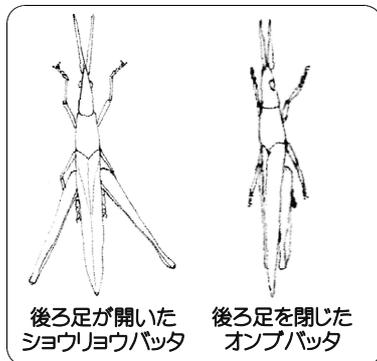


前足どうしをこすり合わせ、頭や眼は前足で拭きます。中脚や後脚は互いにこすり合わせて掃除します。では背中についたゴミはどのようにして掃除するのでしょうか？ 脚の届くところは脚で掃除します。脚の届かない所はどうしましょうか。観察していると面白いことがわかりました。でんぐり返しをするのです。そうして、背中を水面におしつけてゴミをとったのです。この動作はお見事でした。

田んぼの周辺ではショウリョウバッタ（頭の先のとがった日本最大のバッタ）の幼虫もたくさん見られました。よく似たオンブバッタ（小さいオスは大きいメスの背に乗っていることが多いのでこの名がある）の幼虫も見られましたが、後ろ足のたたみ方で簡単に区別できます。オンブバッタは後ろ足をきちんと体につけてとまりますが、ショウリョウバッタの後ろ足は少し開いてとまります。これらのバッタをネコジャラシやオヒシバなどで飼育していると、夏の終わりに成虫になるでしょう。

小さくてかわいらしいアマガエルもたくさん見られました。オタマジャクシがようやくカエルになったのです。皆さんの採集ケースにも入っていましたね。

さて、このカエルを持ち帰って飼育するとなると大変です。田んぼでは水面にたくさんいたミギワバエなどが餌になるでしょうが、生きて動いている小動物しか餌として食べないので、家では餌を見つけるのが困難です。



動物園ではショウジョウバエ（果実に集まる小さなハエ）やミールワーム（甲虫のコメノゴミムシダマシの幼虫）をあらかじめ飼育して準備しています。ではどうしましょう。光に集まる小さなガか原っぱでバッタやウンカ（セミやカメムシのなかま）などの小さな虫を見つけてこられますか。それができる人は飼育してみましよう。

カエルのすみかには水辺や陸も用意してやってね。それから、カエルをさわった後は、かならず手を洗ってください。アマガエルの皮膚には抗菌性のタンパク毒が含まれています。それでは機会がありましたらまた田んぼでお会いしましょう。（高家博成）

昆虫ってどんな生き物？

小さな世界のまが不思議♪

新入会員
高家 博成(タカエ ヒロシゲ)さんのプロフィール

1941年京都府生まれ。1969年東京農業大学 大学院農学
 研究科農学専攻博士課程修了。農学博士。元多摩動物公
 園昆虫飼育係長、井の頭自然文化園水生生物館長等。

昆虫に関する書籍やテレビ番組の監修、ラジオ番組への
 出演など幅広く活躍し、子どもたちに昆虫や生き物の魅力
 を伝え続けている。生き物の生態をおさえた絵本や紙芝居
 作品の人気の高い。

右は高家さんの著作、本の泉社(2014年7月)

アメンボはこの性質を巧みに使って水上生活をしていま
 す。脚には濡れない毛やロウ物質が分泌され、水に濡れま
 せんが、誤って水面に落ちた虫を捕らえて汁を吸って暮ら
 しています。しかし、このようなアメンボも体が汚れると水に
 濡れてしまいますので、たえず体の掃除をしています。ま
 た、水が汚れて表面張力が落ちますと、アメンボは暮らし
 ていけません。水面に起こる波もアメンボにとっては信号に
 なります。餌が落ちてきたときや、メスが近寄って来た時は
 波の違いを感じて接近できるのです。

風も小さな昆虫にとっては大きな問題です。私たちなら
 心地よいそよ風でも台風のようにでしょう。高いヒマラヤ山脈
 の雪の上でも平地に棲む昆虫が落ちていることがあるそう
 です。毎年、季節風に乗って、南方からウンカなどのイネ
 の害虫がやってくるのが知られています。

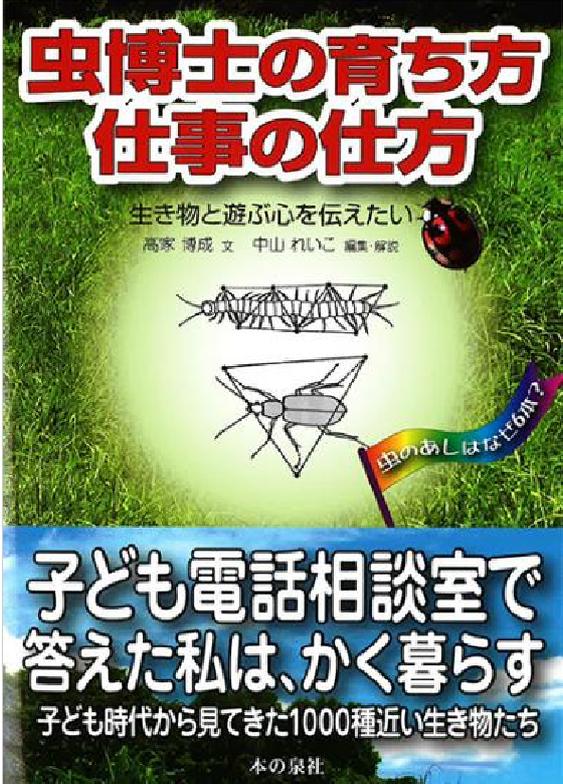
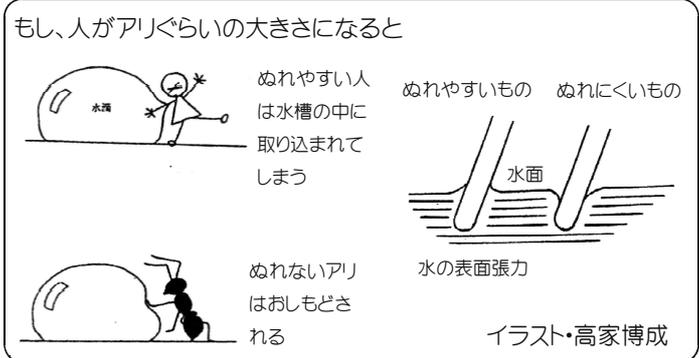
昆虫は私たちの周りに普通に見られる生き物です。一般
 に虫と呼ばれていますが、古くは鳥、獣、魚、貝などを除く
 小さな生き物を虫と呼んでいました。このなかまにはさま
 まな分類上のなかまが含まれています。そのうち昆虫とい
 うのは節足動物(体が節でできていて各節に節の脚をもつ
 動物)の中の6本脚の動物のなかまをいいます。

昆虫の体は私たち人間よりはるかに小さく、普通1~2cm
 で、さらに小さいのは0.2mmほどのヤドリバチが知られて
 います。大きいものでもヘラクレスオオカブトの体長18cm、
 アレクサンドラアゲハの開帳22cm、アフリカや東南アジア
 のナナフシの中には30cmちかくあるものがありますが、多く
 は私たちの手の平にのるほどしかありません。

では小さい世界とはどのような世界で、どのような困難ま
 たは便利なことがあるのでしょうか。

まず雨や風について調べてみましょう。小さい昆虫にとつ
 て雨や風はもっとも厄介な自然現象です。昆虫も私たちと
 同じように息をしています。呼吸は体の両側に開いて
 いる気門と呼ばれる穴から空気を取り入れています。ここが
 水に濡れると息ができなくなりますので、一般に昆虫の体
 表は水に濡れにくくできています。

水どうしはくっつく集まる性質があり、その時にできる膜に
 触れると、その表面張力は小さな生き物にとってはとてつ
 ない力を持ち、もし濡れる性質のものなら水滴の中に引き
 込まれてしまい昆虫が濡れると溺れ死んでしまいます。濡
 れないものは逆に押し出されてしまいます。



チョウ愛好家の中には季節風が吹くころ、この風に吹か
 れて迷ってきたチョウを採集するために沖縄や八重山地
 方を訪ねる人もあるそうです。昔、気象庁が台風の観測の
 ために、潮岬南方500kmの海上で定点観測船を浮かべ
 て観測していたそうです。その乗組員がいろいろな昆虫を
 船上で採集されていますが、その採集品のいくつかは多
 摩動物公園に寄贈していただき、昆虫園の標本室には展
 示してありますので、機会があったら見てください。

風は怖いとはいえ、体が小さくて翅(ハネ)をもつ昆虫にと
 つては、飛ぶのに好都合です。飛行能力は高く、運動視
 覚も並はずれていて、私たちはチョウやハエを手でつか
 むのは困難です。

昆虫は小さくても素晴らしい生き物であることはまた機会
 があればお話ししましょう。 (高家博成)

西府ハケの緑を守ろう！

「後世に残そう！ハケ・用水・わき水」を合言葉に6月28日、「西府わき水まつり・パート1」として、新井孝次郎氏を講師にお招きした。演題は「西府ハケの緑を守ろう！～樹木医からの提案～」である。

新井氏は府中市内在住で樹木医として活躍され、市の自然環境調査員として東京農工大学と国分寺崖線・武蔵台緑地帯の植生調査も手がけている。また、学校や団地等公共施設の密集樹林、とりわけ育ち過ぎ樹木の診断、再生事業を数多く経験され、さらには海外でも活躍されている。



講演する新井孝次郎氏

西府ハケ(段丘崖)は50度～60度の急勾配のため、利用しにくい土地として残ることになった。戦後、一部に植栽されたが、多摩地方特有のシラカシやケヤキを中心とした自然林が残っている。今から40年前、市は大がかりな植生調査を行い、ハケは貴重な自然林であることが判明、市民の共有財産として次世代に残すとして昭和48年、市議会での議決を経て、直ちに買収に着手した。西府町湧水のハケ上に「府中市段丘崖緑地保全地域」の説明板は、その経緯を物語る証拠である。

40年が過ぎ、崩落防止の土留め等の処置は行われたが、植生調査は行われずに推移している。今回、セブシーレヴン記念財団から、わき水まつり事業の助成受託を契機に、市と当会は「事業の協働推進」について協議が整い、公園緑地課も長期的な保全計画策定の意向を表明している。専門家による現地踏査と講演はタイムリーな企画といえる。

講師には5月8日、事前打合と現地踏査に出向いていただいた。一回の踏査ながら、ハケ上、ハケ下遊歩道沿いの樹木・野草など自生種、外来種別や特長・由来を解説しな

がら、結果として104種をリストアップされたのには驚いた(別紙)。そして踏査内容を精査し、講演では保安全管理に有用な助言と指針にまとめていただいた。

当日、西府文化センター会議室の定員(40)を超える45名が聴講された。レジメ配布とパワーポイントの映像により、豊富な経験を織り交ぜながらの熱弁に、自然樹林の保全・管理の重要性を理解された方が多かったことは質疑やアンケート回答からも読み取ることができる。

「お話がウイットに富み、とても楽しく聴講できた。地元の自然をどう保全していくかを考えさせられた」、「『小さな森は手入れをしないといけない』という言葉が印象的でした」、「シュロが大量にはびこるのは深刻だ。クズと共に早急に駆除を」、「質問の時間が多く、とても良かった」。一方、「配られたレジメの説明がなく、やや一般論に拡散した感じ、もっとポイントを絞ってほしかった」との意見も頂いた。

保全計画づくりの指針として有用な講義であった！

レジメは実調査を踏まえただけに、現況把握と課題点を簡潔に纏められ、計画策定の助言・指針に相応しいものと言える。以下3点に要約した。

- ①ハケ周囲が宅地化で分断され、連続性のない“裸の樹林地”となっている。
- ②自生樹木のほか温暖化・乾燥化により暖地性樹木、行政植栽や庭木の進入で氾濫状況である。
- ③将来像(着地点)を見据えた計画的整備が必要。立案段階で行政、市民団体、専門家らの三者協議と合意が重要である。



西府文化センター横の西府町緑地

最後に、レジメを補足して映像により説明されたが、今まで漠然とした理解であったが、ハケ植生の実態がわかりやすく、場所毎にグルーピングされており、この資料をもとにまずハケ巡りを奨めたい。より一層の認識・理解を深めることができること請け合いだ。

(進藤 礼治郎)

第5回 わき水まつり (パート2)

用水の生き物探検隊 パネル展示など

大平 充さんのプロフィール

1982年 福岡県生まれ

・東京農工大学大学院／博士(農学)

産学官連携研究員(博士研究員)

・神奈川県自然環境保全センター

特別研究員

・わき水まつり「生き物調査」担当



わき水まつりが7月17日、18日の両日、あずまや周辺にて10時～16時まで開催されました。今年も水生生物の展示、解説、採集体験のスタッフとして参加いたしました。企画・運営をされたスタッフの皆様、今年も大変お疲れ様でした。このような活動が継続されることはとても意義のあることで、なにより私にとっても嬉しいことでもあります。

昨年よりひとまわり大きくなった姿を見せてくれるお子さん、まつりの開催を知り電車に乗って来訪される方がいるのは、活動の地道な継続の成果ではないでしょうか。

府中用水の採集ではコイ、タモロコ、ドジョウ、ムギツク、アブラハヤ、コクチバス等を観察することができました。なかでもドジョウは多数確認でき、参加された方の多くが自身で捕まえることができました。「田んぼの学校」とも合わせて、今年から採集できた生きものを記録していく試みも始まっています。

地域がもつ自然は、地域の大きな魅力であり、また地域の個性でもあります。わき水まつりは、段丘下からの湧水と多摩川からの用水とそれらを利用した田んぼ、そして崖線の緑が織り成して形成されてきた景観である地域の原風景を思い起こさせてくれるイベントです。

このことは、単に昔を懐かしむということだけでなく、魅力ある地域を考えるうえでの大切な認識を呼び起こしてくれるものです。それゆえに、手作り小さな活動ながらも、大きな可能性を感じています。そして私にとっても、その大切さを改めて認識させてくれるよい機会となっています。

参加者からの寄稿

用水の生き物探検隊に参加された原さん親子

夏休みの最初の日にお父さんと用水の生き物探検隊に行きました。水の色は灰色でした。長靴をはいて、タモ網を持って水に入りました。網を水にさして足でけりました。そして、ザリガニの赤ちゃんや大きなザリガニやドジョウもつかまえました。大きなザリガニをつかまえて楽しかったです。またやりたいです。(はらともゆき:小1)

キツネノカミソリが咲き始めた七月中旬。私の幼少期はどちらかというとインドア派だったので、息子以上に新鮮に感じ、網に生き物が次々に入るのは興奮でした。インストラクターの先生の丁寧な説明の一つひとつに納得。うわさに聞く湧水にも案内していただき、豊かに流れる清流に暑さも

忘れるひとときでした。このような企画が市民の手で続けられているということが、ハケ・用水・湧水とともに、府中の貴重な財産だなと感じました。(原 雅幸)

ハケ下にお住いのYさん

市川緑道「あずまや」で年に一度の七夕祭り、織姫、ひこ星の様な感じの出逢いを楽しみにしています。

子ども達のガサガサ遊び、大人向けのストローで作る海老、シュロ葉でのバッタ作り、みんな、いろいろの思い出が作れてうれしそうでした。友人の少ない私には、大変うれしい時間を過ごすことが出来ました。

西府ハケ下、ハケ上を毎日散歩する私にとって、小川のザリガニ、アメンボ、トンボ、カモなどは、おばあちゃんになった今でも毎日見ることが出来るのは楽しいものです。

でも、道端の雑草が多過ぎるのは、少し気になります。木の方も大雨が降れば倒れて、無残にも伐採されるのを見かけます。これからも皆様のお力で少しでも美しい散歩道になることを願っています。

シュロの葉で「バッタづくり」名人、鈴木 潔さん

7/17日～18日に実行された「わき水まつり」に今年も参加させていただき、大変うれしく思います。残念なことに、初日は台風の影響のため、参加者も少なかったのですが午後からは天気も回復し、子ども達も大変喜んでおりました。

◎地域の方々にお礼／風雨の中、地域のよき協力者・鈴木さんには「パネル展示」など会場設営を、地元商店の方には一時保管場所の協力をいただきありがとうございました。



用水の生き物探検隊。タモ網を手にした大平さん。のぞきこむ子どもたち

今回で5回目の開催となりました。常設掲示板や「広報ふちゅう」掲載、第五小学校・渡辺校長先生の協力も得、児童全員にチラシを配布するなど地域の方々の協力者も増えています。

今年度から府中市インフラ管理ボランティア制度「まちなかきらら」に登録し、年2回の清掃活動の他、パート1では崖線や湧水保全をテーマに学習をし、秋以降は地元の自然遺産めぐりや樹木・野鳥観察、巣箱づけなど年間通して活動を広げています。

今後はさらに地元有志の方々と保全のための協議体を作るなど、崖線や湧水保全、生き物たちが生息できる環境保全活動を進めていきたいと考えています。

(チーム長:浅田多津子)

多摩川に咲く 花の観察会

レンリソウ、980株開花



星野講師(中央)から、花の説明を受ける参加者

今年で第8回目となる「多摩川に咲く花の観察会」は5月9日、関戸橋から郷土の森約1.8kmのコースで行われた。やや雲は多かったが幸い雨にはならず涼しく、植物観察には丁度良い天候だった。

一般市民の参加者は昨年より9名多い24名で、講師(東京農工大学・星野准教授)と市民の会3名・市職員1名の合わせて29名の大勢で行われた。

河原に入る前に中河原公園で手渡された「河原に咲く花の植物リスト」を各自が携え、橋のたもと土手をゆっくり降りて河原に入る。河原に入って最初に観察したのは小さな群落を作っている外来種のオオキンケイギクだ。



ユウゲショウ(夕化粧) アカバナ科の多年草 ピンク色の花

当日はまだ蕾の状態だったが、開花すれば黄色い花が美しい。しかしこの花は繁殖力が非常に強く、他の植物に与える影響が大きいと特定外来植物に指定されていて、個人での栽培なども法律で禁止されている。

外来植物には概して繁殖力の強いものが多いので、いま府中多摩川の植物全体では、我が国古来の在来種より外来種の方が多いようだ。ただ今回は花が咲いてい

る植物のみ取り上げて観察・説明したので、取り上げた60種のうち外来種は25種ばかりだった。

観察会でも見ることができたが、在来種のカントウタンポポと外来種のセイヨウタンポポが交配した「アイノコタンポポ」と呼ばれる雑種もすでに存在している。

参加人数が多かったので、花と講師を中心に大きな人の輪ができてその中で観察・説明する場面が多かった。広い平坦な場所ではそれも出来たが、足場が悪かったり傾斜した場所での観察には苦労した。

石ころだらけで足場の悪い水辺から上がって野球場の原っぱに出ると、視界が広がった開放感も手伝って隊列が崩れ、皆んな思い思いに散策の雰囲気草花を観察して歩いた。



レンリソウ(連理草) マメ科の多年草 紫色の3輪の花

野球場でしばらく休憩をとった後、土手の下の細い一本道に入り、しばらく進むとニセアカシアの林の中で、草丈が2mもあり大型の花序を広げ美しい白い花をつけたハナウドを見ることができた。

観察会も終盤に差し掛かると、ロープ柵で囲った広さ500平米のレンリソウ保護区がある。ここ数年、レンリソウに光が充分当たるよう、春・秋2回、市民による草刈を実施している。その努力の甲斐あって観察会の2日前調査したら980株も開花していた。

因みに昨年は480株だったので飛躍的に開花数が増えたことになる。皆が柵の外から可憐な赤紫色の花を眺めたりカメラや携帯に収めたりで、ひとしきり大賑わいだった。レンリソウと同じ希少種のハタザオなどを観察しながら「かぜのみち」の土手を上り郷土の森の西側に到着する。

5月初旬、多摩川の自然に触れ、美しい草花を観察し、講師からは川や植物の種々の説明を受け、充実した半日となった。最後に閉会の挨拶があり、3時間に及ぶ観察会は無事終了した。

(佐伯郁男)

東京都 あきる野市
生活クラブ協同村にて

福島の子どもたちの保養プロジェクト

福島の子どもたちを招いて

「福島の子どもたちを招く府中市民の会」は、今年も、福島の子どもたち21人を招いて、あきる野市にある生活クラブ協同村で、7月31日から2泊3日間、保養を目的とする野外活動を行ないました。

2011年から始まったこの活動は、福島の子どもたちが放射線量の比較的低い場所に移って、おもいきり外遊びができるようにと、府中市の市民有志が行なっているリフレッシュツアーです。

会は、市民のみなさんからのカンパや民間団体からの助成金と多くのボランティアで運営しています。6月中旬にインターネットで募集をしましたが、1週間もたらずに定員に達しました。参加者の中には、これまで5回連続で参加する子どもたちもあり、その成長に5年の長さを感じます。

自然あふれる協同村で

協同村は、秋川のほとりにあり、たくさんの人が釣りやアウトドアを楽しみ、身近な避暑地としても人気の場所です。

宿泊先の古民家は、田舎の家のような趣があります。敷地内の畑では夏野菜が作られ、キーウィやブルーベリーなどの果物も実り、虫もいます。子どもたちが興味関心を持って遊ぶ自然がたくさんある場所です。

虫を取り、蟬の抜け殻を集め、野原をかけまわるなどの自然に触れることで、ここではじめて出会った子どもたちも、いつのまにか仲良く遊んでいる姿をよく見かけました。



協同村のキーウィの下で散策

外遊びを満喫して

2泊3日のプログラムは、川遊びや花火やバーベキュー、すいかわり、手作りのキャンドルや写真立てを作るワークショップの他にも、今回は、自由にのんびり過ごす時間も設けました。

子どもたちの一番人気の川遊びでは、安全に配慮して、子どもたち全員にライフジャケットを着用してもらい、スタッ

フや保育のお兄さんお姉さんたちが見守るなかで、泳いだり、川の流れに乗って遊んだり、カニを捕まえたり、本当に楽しそうな姿を見ることができました。普段はプールなどで泳ぐことはあるけれども、こういった川遊びはなかなか経験できないということで、みんな大はしゃぎで遊んでいました。



広い野原でムーブメントパラシュートを使って遊ぶ

手作りの食事でおもてなし

食事はすべてボランティアスタッフによる手作りで、何か月も前から、ワーカーズで働くスタッフが子どもたちのためにメニューを考え、大勢の食事を作りました。子どもたちも食事やデザートづくりを手伝いました。特にバーベキューやカレーは大好評で、大鍋いっぱいのカレーも完食で売り切れになってしまったほどです。

ご飯をたくさん食べて、おもいきり遊んで、楽しかった！と言って帰った子どもたちの笑顔に、私たちが癒されました。

福島を忘れない

5年経った今、福島のみなさんからは、こういった保養プロジェクトもだんだん少なくなっていると聞きます。この保養だけでは十分ではないと思いますが、私たちは、ほんの2、3日でも、福島を離れることで、子どもたちの心身がリフレッシュされる効果は期待できると考えています。

福島の子どもたちが元気に成長していくことを願って、これからも府中に住む私たちができることを通して応援していきたいと思います。

最後に、子どもたちのアンケートから

「楽しかった、また来たい」、「ぼくはまたこの企画に参加したいです。魚つりもしたいです」、「川遊びとバーベキューと花火とみんなと遊んだことが楽しかった」、「せみのぬけがらをいっぱいみつけたり、おとまりして楽しかった」、「キャンドル作りや花火が楽しかった」などです。

このアンケート結果を見て、来年もぜひ開催したいと思いました。
(泉 千鶴子)

☀ 猛暑 随想4稿 ☀

私の省エネ、エコライフ

(1)アグロノミスト(自称) 竹田 勇

★農地、農業の保全活動が何故エコ自慢になるのか？
 大気中の炭酸ガス(CO2)濃度が地球温暖化の主因とされており、農業は植物を育てる仕事なので、光合成で、CO2を吸収し、酸素を排出する事から地球環境上よいこととされている。CO2の発生を減らす、節電、ごみ減量、自然エネルギー発電、など同様に評価され、我々の食糧源にもなる大切な産業である。



畑の学校のスイカ祭り

★私がどんな農業保全活動をしているか？

①高齢化の農家のお手伝い(援農ボランティア)、②子供たちを集めて水稲栽培の体験(田んぼの学校)、③環境循環型野菜栽培の体験学習(畑の学校)、④野菜栽培のプロを育てる学校(アグリカレッジ)で体験学習とたくさんの同志の非農家市民と一緒に活動しています。

サラリーマン卒業後の終生の仕事として誇りを持ち、自慢しています。

(2)田中香代子

我が家では、風呂の水を全て玄関や庭の植木に散水しています。今年の猛暑には植物たちもお手上げのようで、枝が垂れています。

夕方、昨日使った風呂の水を小型ポンプで吸い上げまくると、気分的にとたんに涼しくなり植木もホッとしているようにみえます。



お陰さまで庭の植木も元気に

(3)館 浩道

半分笑い話です。今は、すでに退会されている方で、名前を「Aさん」としておきます。

今でこそ余裕と条件のある人は、屋根にソーラーパネルを置いて自然エネルギーを利用していますが、Aさんは、その先駆けのような方で、彼の家の屋根にはソーラーパネルが置かれていました。夏になると、「暑い暑い」を繰り返していたAさん、奥さんから「そんなに暑かったら、濡れたシャツでも着たら」と言われて、即実践したといひます。

(4)葛西利武

つまるところ、「地球温暖化」の原因は人間にあります。その淵源は、18世紀半ばころのイギリスの産業革命にかかのぼるとされます。

人類が豊かさ、利便性、快適さなどを求めた結果、「地球温暖化」という皮肉な結果になってしまいました。それによって生態系、食物、健康などに甚大な被害がでます。

短期的思考が、長期的思考の結果と逆になることはよくあることです。今後は、「足るを知る」、「もったいない」などの言葉が見直されるでしょう。



最後に螻蛄(とうろう)の斧ではありますが、私の省エネ、エコライフの一端をお知らせします。①エアコンの夏の温度設定は28度②移動はほとんど公共交通機関③風呂の残り湯は洗濯に使用④スーパーには買い物袋持参⑤テレビよりラジオ派⑥ベランダに緑のカーテン設置⑦エレベーター、エスカレータ

をできるだけ使用せず、等々です。

私はマンション住まいですが、基本的に6階の自宅までは階段を使います。ほかの建物に行っても10階くらいまでなら階段を使います。歩くことは「脳」を活性化させます。

古代ギリシャの哲学者アリストテレスは「逍遙(そぞろ歩き)学派」の祖と言われます。医学が発達していない時代でも、歩くことの効用を知っていたのでしょう。

心配なのは、10代20代の若者が1階から3階程度でもエレベーター、エスカレータを当たり前のように使うことです。彼らが将来、高齢化したときにどうなるのでしょうか？

※上の写真はベランダに設置した緑のカーテン。昨年まではゴーヤも違わせていましたが、今年はアサガオだけ。種は昨年ものを保存して使用